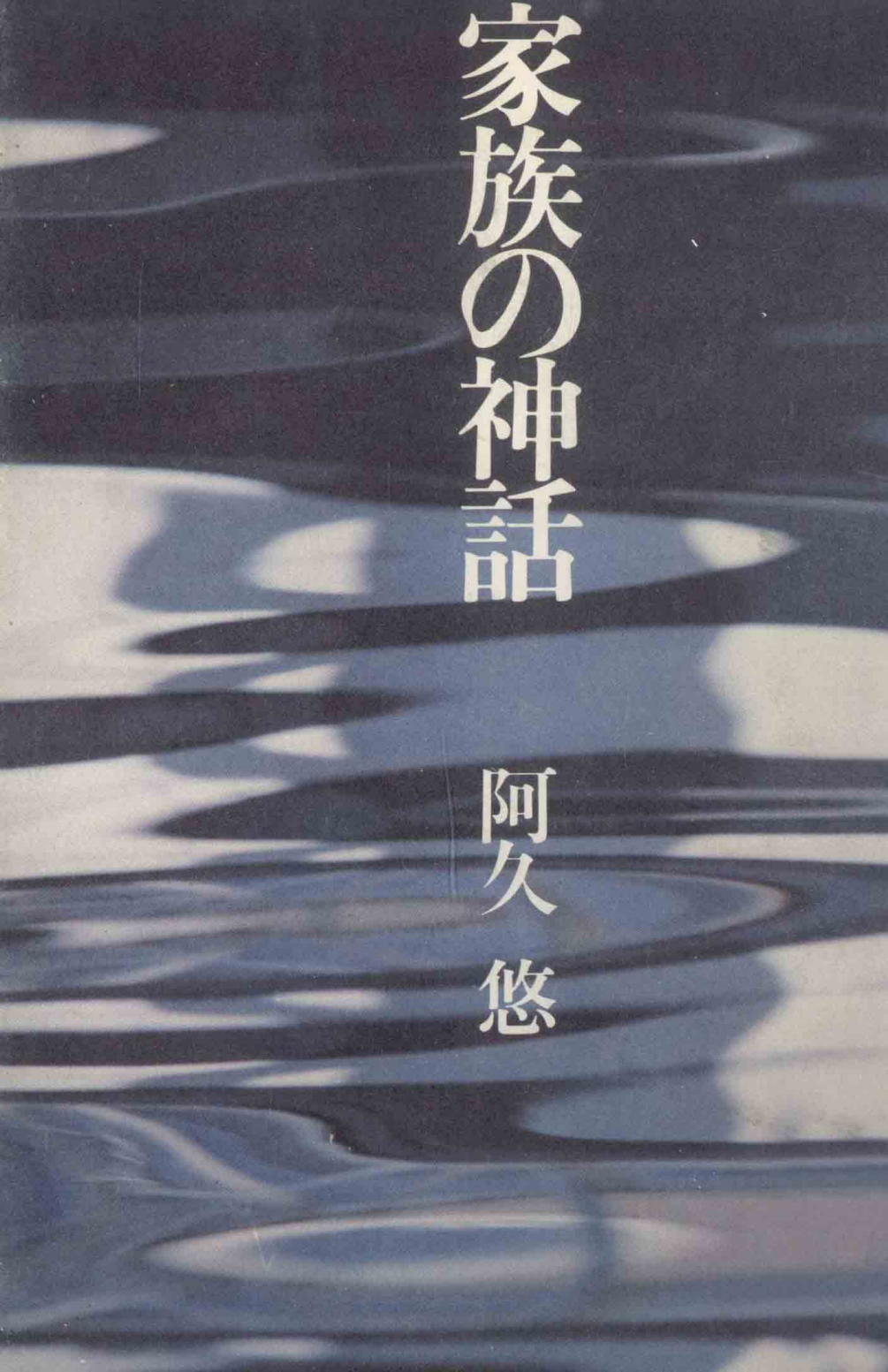


The background of the entire cover is a close-up photograph of water ripples. The ripples are concentric and spread outwards from an unseen point, creating a sense of movement and depth. The colors are muted, with various shades of blue, grey, and white, giving it a calm yet dynamic appearance.

家族の神話

阿久悠

家族の神話

阿久悠



家族の神話

著者—阿久悠

一九八一年七月二〇日 第一刷発行

装丁—浅井慎平

発行者—三木章



発行所—株式会社講談社

東京都文京区音羽二—二十一 郵便番号 一—二 電話 東京〇三(九四五)二二—大代表 振替 東京八一三九三〇

印刷所—豊国印刷株式会社／千代田オフセット株式会社

製本所—大製株式会社

定価—八九〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。
送料小社負担にてお取り替えます。

© YU AKU 1981 Printed in Japan

0093-307846-2253 (0) (☆2)

目次

第一部	ハンフリー・ボガートのような父親へ	7
第二部	ヴィヴィアン・リーののような母親へ	105
第三部	ジェームス・ディーンののような自身へ	217
あとがき		265

家
族
の
神
話

第一部

ハンフリー・ボガートのような父親へ

第一章 勝手にボギーとよばせてくれ

1

おい、おい、それじゃ、まるで瞼まぶたの父じゃなかよ、と友だちはいうんだ。お前には、そのてのウェットはないと思ったのにどういうこったい、ともいう。その上に、あきらかに小馬鹿にした顔で、「チャン！」ていうのかよ、それとも、「ダディ！」かよ、だよ。

どうもこうも、チャンも、ダディも関係ない。

第一、十七にもなった男が、父親にすがりつくなんてことは考えられないが、要するにあなた、あなたが気がなつて来たということなんだ。

そう。あなた。あんたかな。

ついこの前まではそんなことはなかった。保護者の欄に母親の名前を書くことにも、何の抵抗もなかったし、淋しさもなかったんだ。それが何だろうね。

ついこの前と現在との間に何があったというでもないのに、違って来てしまったんだな。考えられることは、十六歳から十七歳になったというくらいで、誕生日に初めて盛大に、シーバス・リーガルというスコッチ・ウイスキーを飲んだけど、もしかしたら、それかもしれない。

その時、何となく男という気分になっていたから、それに触発された気分かもな。

いや、気分で終わってくれればいいけど、もっと重味のあることだとしたら、ちと厄介なことにな

る。具体的にはいえないけど、何から何までひっくり返るおそれ、たとえば、これまでの実に快適な不自由のない生活というものが、一体何なのだい、という種類の苦悩だ。

けど、そこまでは行くまいな。気分だろうな。

でも、そんなふうに、妙に納得させようとするのは、そもそも相当に根の深いことに違いない。さっと聴き流せないものを感じているからなんだ。

そこで、チラと友だちに、雑談の接ぎ穂ぐらいのつもりで話してみると、睦の父じゃなかよ、ということになったというわけだ。

馬鹿。笑えるかよ。あいつら。

「チャン！」

まさか大五郎じゃあるまいし、

「ダディ！」

ともいいません。もしも、あなたに会うことが将来あるとしたら、ちゃんと、

「愛刀さん」

と呼びますよ。そう、愛刀さんだ。

ところで、これは、いやみでも何でもなく、ぼくも昔、愛刀英と呼ばれていたんだね。今は、野々村英だけだ。

もつとも、愛刀英時代はほんの幼児で、おおむねが英ちゃんといわれ、姓で呼ばれることなんかほとんどなかったから、実のところ懐かしくも、又、その名前の方がしっくり来るといった覚えもない。ぼくが、ちゃんと姓名を背負って社会（学校も立派な社会だから）に出てからの野々村英の方が、名前としては実感があるのも無理からぬことだと思うんだ。

まあ、何がいたかったかという、あなたが愛刀秀三で、ぼくの母の野々村佳世が愛刀佳世で、このぼく野々村英が愛刀英であった時代が、確かに十二年前にありましたね、なんてあらたまつてみたわけなんだ。

ありましたね。あったでしょうが。

愛刀と呼ばれていた頃の記憶が、全くといっていい程稀薄なのと同様に、実のところ、あなたのこともおぼろなんだ。

ぼくの記憶力の問題だけでなく、あなたが余り家にいなかった。ぼくとキャッチボールをしたり、動物園へ行ったり、風呂へ一緒に入ったりということが、ほとんどなかったのではないかと思うんだ。

記憶力の問題でない証拠に、いくつかの事柄は明確に覚えているからね。たとえば、その時点を境にして、三人そろって愛刀ではなくなるといふ時のことなどがそうだけど、しかし、それにしても、ぼくは、あなたの顔を正面からまじまじと見たことがないと見えて、顔かたちの印象がないんだ。存在みたいなものはえらく感じるんだけど。

そうなんだな。恋しいとか、懐かしいとかいう思いではなく、今、ぼくをとらえているものは、存在に対する飢えかもしれないな。

そこに山があるからというのと同様に、あなたに存在してほしいという思いかもしれない。極端なことをいうと、何もしくてもいい、ただ、ぼくより高く、ぼくより大きく存在さえしてくれればいいという、冒険家みたいなロマンチックな願望なんだ。

そうだよ。そうなんだよ。少しはつきりして来た。

さて、そんなこんな的心境で、あなたを気にすることが多くなり、時には語りかける必要も生まれ

て来たわけだけど、顔がないんだな。あなたの顔がない。

さっきのロマンチックな願望と多少矛盾はあるけれど、やっぱり、顔という充分こちらの言葉に反応するものがほしいと思うじゃないか。存在があれば、それに向って語ればいいという程理性的でもないんだ。

昔、神様なんて、姿のあっちゃならないものにまで姿かたちをイメージしたように、ぼくも適当な顔を選んでみた。

大した深い意味はないのだけど、ある年代の男たちが伝説にしまったハンフリー・ボガートという俳優を、愛刀秀三の顔にダブらせてみたんだ。

別にハンフリー・ボガートが理想の男性と思っているわけではない。けど、何か存在をそこなわなれものが感じられたんだ。とはいっても、ぼくは、テレビで「カサブランカ」というのを一本見ただけだ。

チャンでも、ダディでもなく、ボギーとよぶことにしたよ。もともと、ちゃんとご対面の時は、愛刀さんだけだな。

とまあ、こういうわけで、愛刀さん、いや、ボギー、気楽に語らせてほしい。

少々くだけた言葉で話しかけるかもしれないけど、でも、ぼくは相当に骨っぽい少年（男といたいが）のつもりでいる。

決して、そんでさあ、ほいでさあ、くらはりませ、なんていう幼児性の強い言葉や、舌っ足らずのしゃべり口はしないつもりだ。

自分でいうのもおかしいけど、近頃の子供にしては、プライドとシャイネスを大事にしているつもりなんだ。

それじゃ。ボギー。

2

十二年前を思い出そうと思えば出来るんだ。それは、必要があつて思い出し、何らかの感慨に浸るというのではなく、ほとんど条件反射みたいな思い出し方だな。

記憶の復活とか、再生といった方が適当かもしれない。何しろ、ぼくの意味が余り入っていないことだからね。

十二年前という、要するに、あなたとぼくの母の佳世が離婚した当時のことで、何やら劇的とも思える一日を中心にして、その前後のことはよく覚えてゐるんだ。

さて、条件反射だけど、それが何によつて起きるかという、雨だね。それも冬の雨。暗がりと寒さを伴つた雨つてやつが、突然ぼくを五歳の子供にして、うろたえさせるんだよ。

確かなことは、誰に確認したわけでもないし、母は明らかに過去のこと、特にあなたとのことは話したがない素ぶりがありだから話も出来ないけど、何やら決定的なことを迎えた時が雨の日で、冬だったのじゃないかな。

話し合いが決裂したとか、親子三人が別れ別れになつて行く当日であつたとか、どうだろう。

まあ、それはともかく、あなたのことが気になりはじめたのと同じ頃から、この記憶の復活というやつが時折起りだしたことは確かなんだ。

しかし、それは大したことはないと思つてゐる。いや、ぼくの間形成とか、精神形成といったものに對して大したことはないという意味だ。よく小説などを読むと、そういった特殊な記憶というもの、精神分析的にいつて性格を解く鍵になつてゐることがあるが、ぼくのは違ふのじゃないか

な。

雨の音を聞いても、ある種の色彩を思い浮かべても、それによって精神に不安を来したり、恐怖を感じたり、又、ヒステリックになったりということは、およそないからだ。

ただ、一つの事実として思い出すに過ぎない。ぼくは、そのことによって、少しも変りはしない。もしかしたら、もう少し事実を知ってみたいという好奇心が芽生えるくらいかな。

その辺りの記憶は、時間的にいつて三つにわかれている筈なんだ。何やら争いやら話し合いやらが絶え間なくなった日々と、劇的な一日と、その後とだ。

記憶はすべて、灰色の粒子がザラついた冬の雨の日という感じだが、いくらなんでも、その年一冬雨だったわけではないだろうから、どこかの部分の印象がすべてにかかっているのだろうね。

ところで、ボギー。

いやいや、自分で勝手にきめた呼び名だけど、やっぱり少し口ごもる。何となく軽々しく思えるし、浅はかな感じもしないでもない。単なる不慣れというだけのことかもしれないけれど、声をかけた後で顔をあからめているような気分なんだ。何か考えた方がいいかな。

けど、お父さんとか、パパとかいったのじゃ、顔をあからめるどころか、汗が出てしまうものな。まあ、しばらくは、照れながらも、ボギーという。

あなたと母は、あの頃、常にい争っていた。それは、ある程度は子供にきかせまいとする配慮もなされていたようだったけど、そんな配慮はどれほどの効果もなく、ほとんどはぼくの耳にきこえていたんだ。

争いというのは、どちらかが加害者で、どちらかが被害者、又は、どちらかが悪人で、どちらかが善人という役割りであるものだと思っていただけ、加害者でも被害者でもなく、悪人对善人という組

み合せでもない争いがあるということに、四、五年前から気づいている。

それまでは、あなたが加害者で母が被害者、必然的にあなたが悪人で、母が善人と思っていたようなところがあつたけど、そういうわけで、今は違っているんだ。

何故、そんなふうに思っていたかという、あなたとはほとんど一緒に過したことがなく、どちらかというと、日常の会話もよそよそしく気をつかいながらしゃべっているようなところがあるのにくらべ、母とは常に一緒に過していたし、今思えば、スナックでお酒を飲んだことすらあるんだ。いや、本当に飲んだのは母だけど、確かその時、

「英ちゃん。飲んでよ」

と母がいつ、およそおいしくない液体をほんの少し口に流しこまれたことを覚えていて。

そんなふうに、何をするでも母と一緒にだったから、それとわかるほどに争いが頻繁ひんぱんになって来ると、母がとても困った状態になっている、その因よになつてゐるのはあなただと思ひこんでいたんだ。つまり、五歳の子供であつたばかりしてみれば、判断してみた結果の善悪なんてわかるはずはないから、好きな方、近い方が初めから善だったわけだ。

何度もいうけど、今はそうは思っていない。いろんなことを思い出しはじめてから、とぎれとぎれの記憶をつないで行ってみると、男と女とか、夫と妻とか、父と母とかいったものが、かなり複雑に入りまじつて争いになつていたということがわかるんだ。

だから、当初は、一方的にあなたの無理解のようなものが争いの種になつてゐると思つていたものが、今は、それ以上に母の自我のようなものが、きわ立つて浮かんて来るようになってゐる。

不思議なことに、あなたの顔を思い出せないのと同様に、あなたの声も思い出せないのだ。争いとはいつても、しゃべつていたのは常に母だったし、その時語られていた言葉も、母のものだけ残つて

いるんだ。たとえば、

「このままでは、あまりに淋しい」

というのは、あなたが家にいることが少ないため、文字通り淋しいということだと思っていたが、このままの形で、妻として、母として終ってしまうのでは、私の女としての人生は淋し過ぎる、という意味だということに近頃気がついたんだ。

「私は後悔したくないの」

という言葉も何度もきいたし、

「女が才能を考えてみてもいいでしょ」

ともいつていたように思う。ぼくが、覚えていたくらいだから、それらの言葉は、おそらく何十回もくり返し語られていたのだろうね。

要するに、母の佳世が、新しい人生を求めたがっていたんだね。その原因はあなたにあったかもしれないけど、母がすべてを捨てたがっていたことは確かだね。

もしかしたら、ぼくをも含めて。

だから、どうだってもでもないけれど、近頃そんなふうに思ってみるんだ。

しかし、違っているかもしれない。何しろ十二年前のことだし、十二年前といえば、ぼくは、ほんの五歳の子供であつたわけだし、又、その後思い出しもしないで、近頃何故かもの思いはじめて、あれこれ、そうか、そうか、そんなわけかと考えているわけだから、あてにはならない。

第一、近頃のぼくと来たら、瞼の父だと友だちから笑われる程、あなたが気にかかり、あなたに傾斜しているのだから、その辺の大人の事情の解釈もあなたに有利になされているかもしれない。

それにしても、沢山しゃべる母に対し、あなたが何もしゃべらなかつたのはどうということだろう